



昭和2年7月7日創立

世田谷区立東大原小学校

同窓会報

平成22年度(2010.7)

発行所
世田谷区大原1-4-6
東大原小学校同窓会

発行人
宮川英子

平成二十二年同窓会総会は四月十八日母校体育館で開催されました。巻頭に当日の同窓会会長(十三回生宮川英子)の挨拶を掲げます。

本日ここに同窓会総会を開催するに当たりまして、多数のご来賓のご出席をいただき有難うございます。

この晴れやかな総会に華をそえてくださるのは、若い新入会員です。三月二十五日、私も卒業式に参列させていただきました。ひとりひとりが壇上で個性豊かな将来の夢を述べていました。

私達八十歳を過ぎた者は将来なりたいことは「男子は兵隊さん、女子は従軍看護婦さん」としか言えない時代でした。それに比べたら、なんと自由で希望ある現代でしょう。

今日ここに晴れやかな笑顔で中学生として出席している新会員にご出席の皆さんと一緒に歓迎の拍手を送りましょう。

同窓会では、更により多くの卒業生を、同窓会員としての自覚をもっていたいただきたいと願い、同窓会の目的である「会員相互の親睦」の一環として、今年から、成人と還暦を迎えられた会員に総会のご案内を発送いたしました。今年は三十五回生と七十五回生です。本日ここに還暦の関根純一さん、萩原百合枝さん、清水光子

さん、田村英子さんが出席してくださいました。今年成人になった方では本日の増田啓太さんが出席してくださいました。当時この期



宮川会長

の二組を担当なさった手塚夕香先生にもご出席いただきました。ありがとうございます。

どうぞみなさん、還暦、成人の会員のお祝いに、あたたい拍手をお送りいたしましょう。

さて、昨年四月、私は会長として「明るく若々しい同窓会へ」と活動の目標を立てました。

この一年間はお蔭様で、四十〜六十歳代の理事も活躍してくださって、少しだけ「若々しく」なれたように思います。この若いパワーを発揮して、地域の活動(おやじの会のデイキャンプ、フリーマーケット、遊び場開放委員会の餅つき大会)とも関わりを持つことも出来ました。母校の行事(運動会、展覧会)にも参観して、元気な後輩に拍手を送ることも出来ました。

会員相互の親睦も同窓会の大事な目標です。校門脇の掲示板を見て「次の親睦旅行に参加したい」というお申し出がありました。嬉しいことです。

本年、同窓会では活動組織を整えました。各部が仕事を分担して独創的なアイデアを発揮してもらいました。会計部の努力で会費納入は順調、ご寄付も多くの方々から賜りました。ホームページもパソコンの得意な会員の力で、年々充実してきています。同窓会報も閲覧できます。「みなさんの声」の投稿欄にも初めての方が投稿してくださることも多くなりました。

旅行、親睦委員会は、温泉旅行、ゴルフの会を実行できました。来る五月十五、十六日には、かつての学童疎開地浅間温泉と下伊那地方を訪ねます。

同窓会のもうひとつの目的は「母校の教育環境の向上」です。昨年以上に母校との連携を密にして母校の望む方向で協力していきたいと願っています。

「こんなことをしようよ」という意見をお待ちしています。皆で楽しい同窓会を作りあげていきましょう。

二十二年定例総会の報告

平成二十二年の総会は平成二十二年四月十八日(日)曜日午後三時より、第一部が杉田副会長(二十九回生)の司会により、二十一年五月四日にお亡くなりになった故加藤清光元会長を悼んでの黙祷から始まりました。第一部では前ページに掲げた宮川会長の挨拶、久末名誉会長(現東大原小学校校長)の挨拶に次いで、来賓紹介、新入会員・成人会員・還暦会員の紹介、新入会員代表の宮越香歩さん・川原里香さん(八十三回生)の元気な挨拶があり、引き続き議事に入



新入会員代表 宮越香歩さん、川原里香さん



久末名誉会長



小林PTA会長



司会 大村、杉田副会長

りました。議事の詳細については四ページをご覧ください。第一部のあととして小林PTA会長の挨拶があり、それから全員で校歌を合唱し、総会議事を終了いたしました。
 第二部では大村副会長(十七回生)の司会により、岸田義明さん(二回生)・山縣武典さん(十四回生)・宮川英子さん(十三回生)によるパネル座談会「私達の町の移り変わり」が多くの古くなつかしい写真画像の投影とともに行われました。
 概要を五ページ・六ページに記載しました。



講師 岸田、山縣、宮川各氏



プロジェクターによる投影

第二部終了後は記念の集合写真撮影を行い、第三部の懇親会に移りました。参加同窓生約三十名。下北沢や第三荏原尋常小学校、東大原国民学校時代の古い写真やまだ森だった守山の写真、浅間温泉に学童疎開した児童の幼い表情が沢山残っている故青井勝太郎先生のアルバム写真などを投影しながら歓談しました。

時の立つのも忘れた五時半、第三荏原小学校応援歌「四季さまざまに織りなせる」と東大原小学校応援歌「胸に日のユニホーム」を合唱して、お開きとなりました。



第2部 終了後集合記念写真



第3部 懇親会風景

同窓会記念パネル座談会

「私達の町の移り変わり」

二十二年度総会第二部では「私達の町の移り変わり」というテーマで、昔の下北沢、小学校の記憶をたどり、私達の地域や学校への理解を深めたいという想いのもとに企画されました。

お願いしたパネラーは、二回生岸田義明、十四回生山縣武典、十三回生宮川英子の三氏、そして座談会の司会は二十七回生白井良雄で行われました。

岸田さんは大正六年生まれで、今年九十三歳になりますが、体力、記憶力とも豊饒(カクシヤク)とお元気で、大正後期から昭和の初めにかけての記憶をお話しいただきました。

岸田さんは大正十四年に当時この地域で唯一あった代沢小学校に入学し、小学五年の時に第三荏原尋常小学校が出来、下北沢地域に居住していた五年生、六年生が移つて来たのだそうです。

岸田さんが少年の頃、大正の末期から昭和の初期までは、下北沢は小田急線も井の頭線もなく、郵便局もなく、勿論学校もない過疎村だったそうです。当時一番街に岸田さんのお父様が郵便局を開きました。その西側には家が無いので、森の上に富士山がよく見えたそうです。いまは商店が立ち並び一番街も道の端には杉の木が沢山あって、家はいくらもな



昭和5年前後の守山の5月



昭和4年の第三荏原尋常小学校運動会

かったといひます。

昭和二年に小田急線下北沢駅が開かれ、成徳学園が出来、昭和四年には小学校が出来、郵便局が開かれ、昭和八年には井の頭線が開通し、昭和十年からはそれまでは守山(まもりやま)と呼ばれ、うっそうとした森だった今の代田六丁目にも土地整備事業が始まり住宅地が開かれ、昭和十年以降下北沢はそれまでの農村から急激に姿を変え、都心に通勤する勤め人の住宅と、それらの人々を相手に商売をする商店の町に変化していったのだそうです。

山縣さんは、昭和三年生まれで昭和十年の小学校入学ですが、下北沢一番街の傍で生まれ、その後東大原小学校の裏に家をお住みになっておられ、昭和初期から現在までの下北沢、小学校の変遷とともに生きてこられたようなお方でした。

山縣さんも少年時代の思い出として守山の森に触れられ、現在の代田六丁目の東半分は深い森に覆われ、二抱えも三抱えもあるような大木もあって、カブトムシなどの昆虫が生息し、子供たちの格好の遊び場だったと話されています。

下北沢は昭和十年頃には急速に人口が増加し、山縣さんが小学校二年の時には新たに北沢小学校が開かれ、多くの仲間が移って行ってしまい寂しかったそうです。

山縣さんは昭和十六年に小学校を卒業し、太平洋戦争時代は中学・高校生でした。昭和二十年五月二十五日の空襲で、学校の裏に住んでいた山縣さんの家は校舎とともに焼けてしまいました。小学校の焼け跡には、鉄筋コンクリートの防火壁と奉安殿だけが独りそびえて、甲州街道を走る車が焼け野原の大原の向こうによく見えたそうです。

スクリーンに大きく投影された写真とともに聞いている人々にショックのさざ波が走りまわりました。



焼け残った防火壁と奉安殿

そして当日事前配布されていた昭和九年北澤三丁目町会が作った、北沢商店街地図にしたがって、当時の下北沢商店街の数々、今は無くなってしまったポンプ屋さん、炭屋さん、紙屋さん、きせるの掃除をするラウ屋さんのお話や、扱い商品は変われども今なお連綿と続けて商売をなさっている商店の話の話を頂きました。

宮川さんは山縣さんより一期上の十三回生ですが、下北沢で生まれ、第三荏原尋常小学校を卒業し、地元の成徳女子商業学校を卒業し、教師検定をとられて先生となり、戦後の東大原小学校に昭和二十三年から三十六年まで奉職し、その間、東大原小学校同窓会の再開に尽力、花見堂小学校長を定年退職された後も、同窓会活動を支え、下北沢の教育現場の変遷とともに生きてこられた方でした。

念願の教師、それも母校の東大原小学校の教師になり、戦後の苦しい時期に、若い先生を支えて一緒になって教育に取り組んだ当時の父母たちに本当に助けられたというお話は感動的でした。こういう先生方の情熱と父母達の献身的な協力があって、我々戦後世代が育ったのだということを実感させられた時間でした。

新入会員の子供達には少し難しい話もあったかも知れませんが、こういう話が頭の中に沁み込んで、将来大人になって生きるときに、長い時間の中の今と言うことをきちんと意識できる人間になって欲しい、そのための時間だったと思いたいと考えたのは私だけだったでしょうか？(文責二十七回生 白井良雄)



昭和2年の成徳学園の周辺



昭和9年北澤商店街地図

平成22年 定例総会議事内容

議案第1号 平成21年度事業報告

同窓会の目的にある同窓生の親睦と母校の発展に寄与するため何か出来ることをしようと模索した。21年度は評議員の若返りを計り、実行出来た。そして学校を中心とする地域の他の組織とのコミュニケーションを積極的に行い運動会、展覧会、餅つき大会、フリーマーケット等各種学校関連行事にも同窓会として協力、出席した。
また同窓生とのコミュニケーションの活発化を狙って、会報とホームページ、掲示板の充実にも努めた。会報は今までの年一回の発行から改め、年2回発行とした。ただし財政健全化のため、会報は会費・寄付をいただいた方々および満20歳、60歳の会員へ配布した。ただし会費未納入の方々へのコミュニケーションの場としてホームページを一層充実させ、会報もPDF化したものをホームページで見られるようにした。その結果会報への寄稿、ホームページの掲示板への書き込み、掲示板を見ての問い合わせが増加した。
同窓会の強化を図る為、計画した同窓生名簿の充実と電子データ化を完了した。現在名簿掲載人数は12205名で卒業生学籍番号登録者の101%である。(転校して卒業時学籍番号に登録されていない会員も含むため100%をオーバーしている。)21年度から4月1日までに会費や寄付をいただいた方は268名、そのうち21年度会費を納めた会員は259名だった。
また会員相互の親睦をはかるため、「みんなで温泉へ」と言う旅を企画し、熱海への親睦旅行を19名の参加を得て実施した。また親睦ゴルフの会も9名の参加を得て実施した。

議案第2号 平成21年度決算報告

収入の部			支出の部		
	予算額	決算額		予算額	決算額
会費収入	300,000	311,000	総会費	35,000	49,813
新会員入会金	10,000	11,200	文具等消耗品費	50,000	75,425
懇親会費	30,000	58,000	活動費	200,000	105,432
名簿売上		1,000	備品購入費		73,553
利息		171	通信費	250,000	124,810
寄付金	350,000	545,000	会報費	110,000	206,470
記念誌販売	15,000	12,000	振替負担費用	20,000	16,090
当年度合計	705,000	938,371	当年度合計	665,000	651,593
前年度繰越金	374,551	374,551	次年度繰越金	1,344,951	1,591,729
特別会計繰入金	930,400	930,400			
総計	2,009,951	2,243,322	総計	2,009,951	2,243,322

報告事項 前年度役員の変動に関する報告

本年度は評議員及び理事の改選はありません。
ただし理事の加藤清光氏(6回生)は21年5月1日ご逝去されました。
評議員の若返りと会の活性化のため下記の4名の方に評議員を新たにお願ひしました。
飯田 朗(33)、小山田 忠(34)、窪田 賢雄(47)、金子 賢三(49)

現時点の東大原小学校同窓会役員・評議員

会長 宮川英子(13)
名誉会長 現任校長 久末節子
参与 岸田義明(2) 岩下秀男(12)
副会長 大村昭夫(17) 杉田 浩(29)
理事 大月文江 (14) 野地勝彰 (24) 臼井良雄 (27)
渡辺 翠 (27) 重山まこと(29) 福士木綿子(29)
小清水和子(32) 宮田維久子(32) 神谷良男 (33)
益井純子 (33) 梶川照矩 (33) 中村清子 (33)
斎藤耕一 (34) 関根純一 (35) 上原謙介 (58)
大橋園子 現任副校長

平成21年度監査報告

前期決算書類を慎重に監査した結果いずれも適正且つ妥当なものとして認めます。

平成22年4月1日 監事 礮 正格
下條 由之
山縣 武夫

議案第3号 平成22年度事業計画

懸案の母校の発展支援のテーマは、母校とのコミュニケーションを更に強化する。またPTA、おやじの会、地域の会との連携も繋がりが出来てきたので、積極的に連携を図る。
22年度はPTAが取り組んでいる「学童の通学安全のための取り組み」等の諸テーマに協力し、地域連携の実績をあげる。
同窓生親睦のテーマは22年度5月に、学童疎開の跡を訪ねて、浅間温泉と伊那への旅行を実施する。当時の貴重な写真をプロジェクターで投影したり現地関係者の話を聞いたり、皆で学習をして旅を楽しむ旅行にしたい。
その他親睦ゴルフの会、親睦温泉旅行などは継続実施する。
また21年度継続して名簿の精度向上、電子データ化を進める。住所があっても古い住所で連絡がつかない同窓生のデータについては、各クラス会の幹事の方々の協力をいただき整備する。ただし個人情報の漏えいには注意する。そして会員の増強を図る。

議案第4号 平成22年度予算

収入の部			支出の部		
	予算額	前年実績		予算額	前年実績
会費収入	300,000	311,000	総会費	40,000	49,813
新会員入会金	6,000	11,200	文具等消耗品費	100,000	75,425
懇親会費	50,000	58,000	活動費	200,000	105,432
名簿売上		1,000	通信費	150,000	124,810
利息		171	会報費	220,000	206,470
寄付金	350,000	545,000	振替負担費用	20,000	16,090
記念誌販売		12,000	備品購入費		73,553
当年度合計	706,000	938,371	当年度合計	730,000	651,593
前年度繰越金	1,591,729	1,304,951	次年度繰越金	1,567,729	1,591,729
合計	2,297,729	2,243,322	合計	2,297,729	2,243,322

評議員 岸田義明 (2) 岩下秀男 (12) 吉田 赳 (12)
宮川英子 (13) 大月文江 (14) 礮 正格 (15)
大村昭夫 (17) 下條由之 (17) 山縣武夫 (18)
大塚弘章 (23) 野地勝彰 (24) 臼井良雄 (27)
渡辺 翠 (27) 大竹英一 (27) 足立遼三 (27)
富安好恵 (27) 岩田玉江 (27) 杉田 浩 (29)
重山まこと(29) 福士木綿子(29) 宮田俊二 (31)
岩本照雄 (31) 小清水和子(32) 宮田維久子(32)
神谷良男 (33) 梶川照矩 (33) 中村清子 (33)
益井純子 (33) 飯田 朗 (33) 斎藤耕一 (34)
漆畑光一 (34) 大岡雅子 (34) 小山田忠 (34)
関根純一 (35) 窪田賢雄 (47) 渡辺明男 (48)
金子賢三 (49) 上原謙介 (58)
大橋園子 現任副校長
監事 礮 正格 (15) 下條由之 (17) 山縣武夫 (18)
(())内は卒業回数、何れも任期は23年3月末)

同窓会は平成二十二年五月十五日と十六日「学童疎開の跡を訪ねて」の旅行を行いました。その報告です。

旅行 「学童疎開の跡を訪ねてに参加して」

臼井良雄（二十七回生）

戦争が終わった時に五歳だった私には学童疎開の話は歴史の一場面としての知識の世界でしかありませんでした。今回その跡を訪ねる旅に参加させていただき、少しはその辛さ、悲しさを追体験出来たような気がしています。

岩下前会長が八十周年記念の『故きを温ねて』を編集なさっていた頃から、一度同窓会の旅行で、学童疎開の跡を訪ねる旅を企画しようという話が出ていたようです。平成二十一年度になって、なんとか実現しようと言う機運が高まり、平成二十二年のお正月を利用して三十四回生の斉藤耕一理事が東大原小学校の学童疎開について詳細な調査を実施し、資料を作成し配布するに至り、平成二十二年一月二十二日の理事会で正式な企画が決定しました。

日時は平成二十二年五月十五日から十六日の一泊二日。行く場所は浅間温泉、当時の面影を残していて東大原小学校の生徒を受け入れた宿ということで「栄の湯」を宿泊先に選定。

当夜は浅間温泉の古老を招いて、学童疎開を考える勉強会開催。翌日はレンタカーで下伊那地方の疎開先のお寺三、四か所を訪問する。

などの大綱が決まりました。

どんな旅だったかを簡潔に記した宮川会長のホームページ掲載の記事がありますから以下転載します。

「五月十五、十六日、計画通りに松本、下伊那を訪ねました。一行十二名、当時児童を受け入れていただいた「栄の湯」に宿泊、現地観光協会副会長、本郷市歴史研究家の野本氏の助言を受け、斉藤耕一氏作成の資料をもとにビデオによる学習会を行いました。臼井、神谷両氏の緻密な計画のもと、自身一年生で疎開した野地氏の、行

き届いた案内で、再疎開先の下伊那のお寺も訪ねることができました。前会長岩下参与もマイカーで参加いただきました。快晴に恵まれて行く先々から残雪の山々が遠望されましたが、当時の子ども達が親を思つてさびしくこの山を見ていたであろうと思ひ、胸がいっぱいになりました。

同窓会の若い力が、このプランを見事に達成してくれたことに感謝しています。更に仕上げの企画もあり、この旅の成果をまとめあげていくことに努力いたします。ご協力ありがとうございました。宮川英子」

この旅に先立つて、当時、学童疎開に児童を引率していらつしやつた故青井勝太郎先生の奥様から、先生が現地で撮影された数々の写真が収められている貴重なアルバムのご寄贈をいただきました。

私達は、その写真に写っているのと同じ場所で、六五年後の私達の集合写真を撮ることを一つの目標としました。

その成果をモノクロですが、以下にご紹介いたします。

また夜の勉強会も大変実のあるものでした。斉藤理事が調べた内容と青井勝太郎先生の残された写真とプロジェクトで拡大映写し、地元の竹の湯の支配人の息子さんと当時小学五年生だった野本道夫さんの思い出話を聞くことが出来ました。当時は浅間温泉も食糧難で、野本さんは



昭和19年 浅間温泉藤美の場所



平成22年5月 左写真と同じ場所

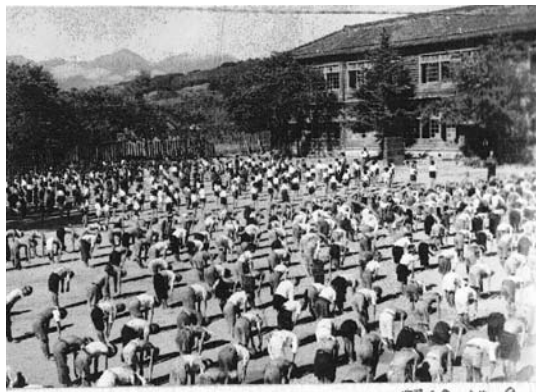
東京から疎開学童の親がお見舞いに来るたびに持参するおいしいお土産のお菓子や、地元の子供たちにも平等に配られ、それが一番の嬉しい思い出だったという話には現実感がありました。

また幻の文献と言われた松本市本郷公民館発行の文集「遠い太鼓」を持参なされ、快くお貸しいただいたのには一同感激でした。

翌朝早くから浅間温泉の街を歩き、当時の学童が歩いて通った本郷小学校にも行ってみました。坂が多いで

すが緑が濃く、西に常念岳をはじめとする北アルプス、南に乗鞍岳が望める美しい街で、温泉に毎日でも入れたこと、東京からの他校の生徒を含めると千人以上の学童疎開仲間がいたことなどを考えると、ここに疎開した生徒は、他の疎開地に比較すると、幸せだったのではないかとも思いました。

そのあとレンタカーで伊那に移動、まず下伊那郡高森町山吹の領



昭19.10.9

昭和19年 浅間温泉本郷小学校運動会



平成22年5月 本郷小学校訪問



浅間温泉栄の湯での夜の勉強会

法寺、そしておなじく高森町下市田の松源寺、そして飯田市座光寺の如来寺（現在は元善光寺）、最後に飯田市上郷鶏足院を訪ねました。

みなさん歓待していただきましたが、浅間温泉にくらべて、周りが寂しいこと、大きな本堂があるだけの寒々とした部屋で、お風呂も不自由だったようで、浅間温泉からここに移った当時はどんなに学童は心細かったかと偲ばせるものがありました。

学童疎開の思い出と今回の旅に参加して

野地勝彰（二十四回生）

ぼくが東大原に入学したのは昭和二十年、終戦の年ですから学童疎開の最後の学年ということになります。疎開に行く児童は入学前の三月から毎日学校に行つて点呼を受けていましたが入学式に出た記憶はなく四月十日過ぎに出発しました。当時の校長は大久保先生で疎開先まで同行していただき中央線の列車の中で先生のズボンに朝のうがいの水をかけてしまったのを覚えています。

ぼくは二人の姉が浅間温泉の富貴の湯に疎開していましたので両親も安心して一人息子を疎開させたのでしょう。一年生からはぼくと石橋さんという女子の二人が参加しました。姉達はすでに富貴の湯から下伊奈郡喬木村にある安養寺に移転しておりぼく達はそこに一緒にになりました。したがって今回訪問した浅間温泉には行っていません。辰野で飯田線に乗り換えて市田駅から天竜川を渡って歩きました。十年ほど前にタクシーで行きましたがこんな遠い道を歩いたのかとびっくりしたものです。

母は息子のためにとその頃では貴重な白米のおにぎりを持たせてくれましたが安養寺について富貴の湯からの移転組の女生徒から一つ欲しいと言われて自分だけで食べたいと思って断つてだいじに持つていて結局腐らせてしまいました。

毎朝境内で男の子は軍歌を歌いながら乾布摩擦をするのが日課でした。男子と女子は別々の堂でしたが十年ほど前に行つてみたらこ

んなに狭いところにいたのか、境内も寺の前の川もこんなに小さかったのかと、子供の頃はすべてが大きく見えるものです。

安養寺には一ヶ月ほどで五月には飯田市郊外の座光寺村にある如来寺（元善光寺）に移りました。現在は観光バスも来るお寺ですが今の平和殿と言われている高台にある大きな広間で男女一緒に生活しました。今回の訪問ではこの広間を訪ねましたがここで皆で生活していたのだと感慨一入でした。ここには十一月に帰京するまでいましたので疎開の思い出は主として如来寺についてです。

七月ごろ父が会いにやってきました。戦局がいよいよ厳しくなり四十を過ぎた父にも召集令状が来たのでこれが最後と会いに来たのです。その時は父の顔を見てもすぐにはわからずそれだけ現地に慣れていたのでしよう。父は結局終戦になったので入営はしませんでした。そうやって子供に会いにくる親も結構いました。一番街の鎌倉通り突き当たりである三河屋酒店主の尾崎さん（今の店主のお父さん）が慰問に来てくれる時は食べ物を持ってきてくれるのでとても嬉しかったものです。毎日おなかをへらしていたのが強烈な思い出です。ぼくの背が低いのもその頃の栄養不足が原因だと今でも思っているほどです。お寺の縁側にとりもろこしが干してあるのをこっそ



昭和20年 高森町松源寺の疎開児童



平成22年5月 同所訪問

りつまんだりしていました。先生方も察してわずかな量のご飯の盛り付けも茶碗の真ん中を飯で盛り上げ、周りを溝のようにして見た目を工夫していました。当時の写真は現在でも学校が保存していると思います。まさに飢餓集団です。学校は全員で座光寺小学校に通いました。一年生の担任は近藤先生という女性の先生でしたがぼく達二人の疎開児童を放課後に教室に残して自宅で作ってこられたお弁当を時には食べさせてくれたものです。あの優しさ之恩は今でも決して忘れることはありません。

ある時前にいた安養寺に招かれてみんなで出かけたことがあります。歓迎されておなかいっぱいに食べましたがいつもの空腹に急に沢山食べたせいでしようかその夜痛くなってもどしてしまいました。

こうして八月十五日の終戦を迎えました。帰京したのは十一月になってからでした。いよいよ帰るときになつて全生徒が付近の民家に呼ばれて分宿しました。その時もおなかいっぱい食べさせてもらったのを覚えています。

八ヶ月ぶりに帰って来た東大原は校舎の殆どが焼けて防火壁がむきだしで立っていました。この疎開はぼくの人生でもっとも強烈な経験となっています。



元善光寺にて 平和殿を指す野地さん



当時寝起きた平和殿で

この原稿は同窓会報平成十三年号に掲載されていましたが、今回疎開特集号として、筆者の了解を得て、字数を減らして再掲させていただきます。(担当 十三回生宮川英子)

疎開の思い出

栗石幸子(旧姓廣瀬)(二十一回生)

私が東大原国民学校に入學したのは、昭和十七年四月、その当時の校舎は木造二階建てで、広い校庭を取り囲むように建っていました。

三年の夏、学童疎開が始まり、私達の学校は長野県松本市浅間温泉に行くことになりました。夕方、校庭に集まり、暗い中を列をつくって、下北沢駅に行き大勢の親達の見送りを受けて、新宿へ。

そこから近隣の小学校の児童も集まって、特別列車で松本へ向かいました。まるで遠足に行く気分、松本から電車で浅間温泉に行きました。

傾斜地には立派な旅館が沢山建っていて、温泉の町らしく道の両側の溝から湯気が吹き上がっていました。各旅館に分散して生活することになりました。代沢小・池尻小・若林小も、ここに疎開していたようでした。私達女子生徒は、当時本部になっていた「富貴の湯」のお世話になることになりました。

親が貴重な白米で作ってくれたオニギリも、長い時間の旅で腐って食べられなくなっていました。その頃になると、親から離れて、ここで暮らすのかと、



故青井先生アルバムより 浅間温泉での女子児童

じわじわと淋しさがこみ上げてきました。学年別に旅館の一室で勉強が始まりました。

遠足を兼ねて、燃料不足を補うため、タキギ取りにも行きました。別棟には特攻隊の人達も泊まりに来ました。片道のガソリンを積んで飛行機ごと敵に体当たりをして戦死してしまう人達です。上官に叱られている下士官の人がとても可哀想でした。

私達を呼んで飛行機の中で食べる緑色のお菓子を下さったこともありました。その後、あの人達はどうなったかと私達は話し合っていました。

松本連隊が近くにあつて、演習を見学に行きました。様々な色の煙幕の中を兵隊さんたちが実戦さながらの訓練をしていました。

秋も深まり、遥か向こうに真っ白いアルプスの峰々が見え、張り詰めた冷気が感じられるようになります。野山の木々が一斉に紅葉し、その美しさといったら皆さんには是非お見せしたいようでした。

しかし、真冬には、零下十四度になったこともありました。

廊下は水を垂らすとすぐ凍りました。みんなシモヤケになり、それが崩れて腫れ上がりました。私の手には今も傷跡があります。

昭和二十年に入ってからでしょうか、真夜中に隣の村に地響きとともに爆弾が落ちました。私達は真っ暗な中、防空頭巾をかぶり、教えられた通り目と鼻を両手でふさぎ突つ伏しました。あの時ほど恐ろしく思ったことはありませんでした。

三月に六年生が卒業のため、帰京することになりました。見送りに駅まで行ったとき、遙か上空にB29爆撃機が銀色に光って見え、空襲のサイレンの中、襲われるかと思ひ、雪の道を泣きながら走って旅館に逃げて帰りました。

四月に入り、この辺りも危険と言う事で、もつと山の中の光専寺(天竜川沿い・下伊那郡市田村)というお寺に再疎開しました。

天竜川の名の通りその当時は水量も豊富で真青で、その速い流れといたら見えていて恐ろしい程でした。高台にある市田国民学校に村の子と一緒に通いました。疎開児童だけの組だったと思います。

手旗信号や電信(ツートン・ツー)を習いました。

右手が爆弾にやられた時の為に左手で食事をする訓練もしました。お寺での生活は国から配給された食料ではとても足りず、注連澤・青井先生方は皆が寝静まつてから暗い田舎道を駆け回って、農家の方々に食物を分けて貰いに行かれたそうです。

五十年も経つてから、この事を注連澤先生に伺いました。一緒に世話し下さった松本、注連澤両奥様、川崎先生のお嬢様、みんな大変なご苦労をお掛けしました。

食事はフスマ(小麦の外の皮)の団子・カボチャ・大豆の御飯(米は一口)・サツマイモのツルなどでした。でも牛乳や果物もよく出して下さいました。後日、他の地域の人達の話を聞き、先生のご苦労と村の方々の暖かい援助のお陰で私達は恵まれた方だったと感謝しています。でも子供達は何時もお腹が空いていて、農協に唯一売っていた七色唐辛子を買って来て、皆で分けあって舐めていて、先生に見付かり取り上げられてしまいました。

時には重い病気になった子供も居ましたから、先生方、ご住職様はどんなに心配なされたことでしたでしょう。

「あの山の向こうは東京」と思っていましたから、その山に向かって歩き出した子も居ました。皆で夕暮れの中を探しました。結局本堂の下に隠れていたという事です。

昭和二十年八月十五日、お寺の本堂に並んで、先生から戦争に負けたとのお話を聞き、みんな悔しくて泣きましました。絶対勝つと思っていましたから・・・

そのうち子どもたちの間で「親達はアメリカ兵に殺される」という噂が広がりました。



昭和20年10月 東大原小学校

小さな胸は不安な思いでいっぱいでした。

戦争が終わっても直ぐには東京に帰れないでここで冬を迎えると言われていましたが、十月に入り、急に帰京することになりました。

荷物を東京に送った後、二人ずつ農家に泊めて頂きました。ご家族みんなで親切にして頂きました。今も文通させて頂いています。

翌日、大勢の村の方々がお見送りくださる中、市田駅を発ち、東京へ帰りました。下北沢の駅から成徳の辺りまで来たとき、そこから先が一面の焼野が原になっているのに驚きました。道路の両側には瓦礫が積もったままでした。

学校は校門の右側と左側の校舎が半分が残っているだけで、あとは全部焼けていました。残っている教室は十教室位で、椅子も机も無く、ムシロを敷いて床に座り、午前と午後の二部授業が始まったのでした。教科書もあまり無く、先生が作った茶色の藁半紙にガリ版刷りした教材で勉強しました。歴史の教科書はあちこち黒く塗り潰されていて、「ここに何が書いてあったのだろう」と思いながら勉強しました。

戦後の教育は丁度過渡期で先生方も大変な時代だったと思います。が不自由な中にも親元から通学できる事を幸せに思っていました。お世話になったご住職には年賀状を欠かさず差し上げておりました。

昭和五十年、戦没者慰霊祭に招かれて今は高森町となったお寺を訪ねました。懐かしい第二の故郷のような町に、バスから降り立った時山々の姿は少しも変わらず、子どもどきに吸った空気とともにありました。お寺の境内も山門も昔のままでした。

ご住職はすでに他界されていましたが、当時若く美しかった奥様は七十八歳になられていました。当時の美しい読経の声が忘れられませんでした。

その後、もう一度、お寺を訪ねました。その時は友達に声掛け合っ

て十二人程でお伺いしたのでした。私達が経験したようなことが二度と起こることのないよう戦争の無い平和が続くことを心より願っております。

追悼

安野好夫さんは北沢生え抜きの地主さん一家で、永年、地域の発展に大いに貢献された方です。平成二十一年十一月十九日八十七歳でご逝去なされましたが、この原稿は生前北沢高砂会報「かがやき」に寄稿されたものです。

ご遺族様と高砂会会長木村光治様のご了承を頂き、追悼の意をこめて編集の上掲載させて頂きました。(担当十三回生宮川英子)

私の子供の頃

安野好夫（八回生）

私は、戸籍謄本に依れば「大正拾老年八月、東京府荏原郡世田谷町下北沢六百八拾五番地」で生まれた。之は今住んでいる北沢四丁目二十七番地に他ならない。この頃この辺は、自宅の周囲に麦、芋、豆、野菜などを作る農家が点々としていた。

そこに、小田急、京王などの便と相俟つて移り住む人々が多くなり、いわゆる山の手住宅地となっていた。井の頭線は昭和八年に公園駅まで開通した。私が小学五年の頃で、それまで井の頭公園に行くのに新宿經由中央線だったが、井の頭線一本で行けるようになった。北小と北中を結ぶ井の頭通りは水道道（スイドウミチ）と呼ばれ、処々に杭が打たれていて自動車の通行は出来なかった。（水道管の保護のため？）

北中の北西隣りを流れていた水は、あおぞら公園の凹地を通り、北沢三丁目の専光寺の方に流れていた。今は暗渠となっているこの小川も、兩岸の高台に林・畑が多く、川沿いには、釣堀屋、池、畑などが並んでいた。鮎、泥鰌、めだか、えび、たにし、蛙、蛇、昆虫、自然が一杯であった。子供にとっては、すべて遊びの対象であった。

水を落とした池に春の雪が積もると、ガキ大将はその雪の消え方を観測する。一樣には消えない。早く黒い土が現れる処を見付ける。其処は湧き水があるとか、陽当たりが良いとか、その池の動物にとって、

一番先に春を感じる処なのである。そこで我々はバケツとスコップを持って泥鰌を掘りに行く。掘り起こした沼底の泥の中には、池の主かと思うようなのが面白いように取れる。

その他魚とり、探検、水泳、山登りなど。樹の上に網や板で陣地を作ったり、秘密と称してベーゴマやビーダマを埋めたりした。

笹舟、竹馬、水鉄砲など、自分で作って遊んだ。私は左利きなので駄菓子屋で買った独楽を紐で廻すと数回で紐の振れが戻ってしまふ。そこで父に教えてもらって、左縄を縛うことを覚えた。

昆虫採集は小学校高学年で折り畳み式の捕虫網・青酸カリの毒瓶・展翅板など本格的に行い、井の頭公園の近くにあった平山博物館の平山先生（蝶などの専門書の著者）のご指導を受けていた。

それがきっかけで、その後、理科系の道を進んだ。

私の誕生から今日までを大別すると、戦前、戦中、戦後となる。

別の見方をすると、ラジオも無い時代に生まれ、ラジオ放送がはじまった。白黒テレビが始まった年、海軍に入った。カラーテレビが始まった時には、海上自衛隊員として神戸に居た。

また、子供の頃、活動写真、ジントラ、弁士等と言われていたものが、トーカー、天然色、映画となっていたのであった。

小学校は生徒数二千人ぐらい居て、教科書は全国一律の国定教科書だった。児童は青つ凍をたらし、冬はアカギレになっていた。

当時は野菜づくりの肥料は人糞だったから、学校で定期的に検便を受けさせられ、回虫が居ると虫下しを飲まされた。

私の子供の頃と現代の子供を比べると、寒心に堪えない事がある。それは今は子供が自殺したり、人を殺したりする事である。

更に悪質ないじめがある。私の子供の頃も喧嘩はよくしたが、そこには自然発生的なルールがあった。口げんか、殴り合い、取っ組み合い・と色々の段階があったが、棒や道具を使うことは厳に禁じられ、年下の者や女をいじめたり、多勢で個人を攻撃することは、恥かしい事とされていた。また、恥かしい行為を身内から出すと、家、クラス、

学校の恥とする連帯感が強かった。

喧嘩をしても、子供らしさを失うことはなかった。（完）

同窓会費納入、寄付のお願い

同窓会の運営は基本的には同窓生の無償のボランティア活動に依っています。が、会報の作成、各種事業の推進等にどうしても経費が発生します。

これを支えて頂くのが同窓生の皆様からの年会費(年一千元)および篤志による寄付金です。

皆様の東大原小学校の同窓会を末永く継続するために、ご協力お願いいたします。

同窓会への連絡、問合わせ、寄稿の送付、会費・寄付の送金の方法について

同窓会の事務所の所在地は、会則では「東大原小学校」となっております。しかし現状では、学校内で事務を行うことが、学校管理上の理由で出来ません。会員各位にはこの点でご不便をお掛けします。

現在の事務所の住所は左記のとおりです。常時人はいませんので連絡は郵便かFAXでこちらにお願い致します。

郵便番号 155-0031

世田谷区北沢2丁目35の9

清水ビル5F

東大原小学校同窓会事務局

FAX 03-5454-5356

年会費、寄付の振込先は左記です。

郵便振替口座 00130-4-403259

東大原小学校同窓会

平成22年度の会費ないしは御寄付を頂いている方 数字は卒業期数(平成22年5月末現在 221名)

02 岸田 義明	13 藤平 賀寿子	17 中八 若葉	24 後藤 彦彰	27 永野 勝一	30 浜野 巖三	34 齋藤 耕一
07 中田 大郎	13 武田 千恵子	17 木間 江里	24 野地 菊枝	27 大岡 匡房	30 石井 修悟	34 藤岡 平三
08 小泉 秋子	13 山本 恒子	17 笹間 精一郎	24 島田 勝美	27 大場 偉久	30 南雲 悟	34 大谷 根純
10 中島 寿子	13 西村 英子	18 菊田 芳郎	24 島田 波天	27 多則 央	30 依田 寿子	35 関根 純一
10 三宅 喜代子	13 福島 昭子	18 酒匂 健男	25 千々波 敏之	27 杉浦 保夫	30 大村 芙美	35 杉村 隆夫
11 朝倉 啓	13 土肥 京子	18 小平 弘子	25 岩崎 延男	27 尾村 彰彦	31 宮邊 俊二	35 市川 愛子
11 嶋田 新一	14 山縣 武典	18 江里 信子	26 竹内 浩一	27 香中 敬子	31 末吉 真佐	35 須貝 光子
11 上甲 ミドリ	14 鈴木 友一	18 熱田 千津子	26 菅沼 雅清	27 杉山 朝子	31 重松 忠純	35 清水 英子
11 石井 はる	14 永坂 孝美	18 大島 宏義	26 剣持 正敬	27 渡辺 和子	31 藤村 純子	35 田村 原合枝
11 角田 瑤子	14 依田 孝美	18 山縣 武和子	26 杉本 正三	27 渡田 治三	31 野村 清子	35 萩原 百江
11 青井 文子	14 平野 愛子	18 小田 原達雄	26 益津 マツエ	27 麻田 遼三	31 野中 雅治	36 丹羽 雅子
11 山崎 康子	14 大月 文江	18 伊藤 達子	26 齋藤 初美	27 足立 修	32 中川 桂子	36 城玉 香子
12 深谷 謙二	15 佐山 實介	19 乾 允子	26 谷田 洋子	27 佐藤 好恵	32 増田 和子	36 福井 節子
12 岩下 秀男	15 今井 兼史	20 田島 京子	26 森定 真寿子	27 富安 睦治	32 小清水 啓子	36 畑名 由美子
12 加藤 信朗	15 齊藤 健正	20 鎌野 眞沙也	26 小泉 千恵子	27 大島 雄一	32 神田 保子	37 石山 千代子
12 吉田 二郎	15 大矢 重夫	20 中野 幸子	26 赤津 信俊	27 高橋 秀智	32 鈴木 維久子	38 中野 弘子
12 美濃 部昭雄	15 礪 正格	21 零 龍子	26 上神 俊秋	27 寺嶋 敏子	32 宮田 澄江	39 野良 桂子
12 平田 健蔵	15 高見 穂	21 志賀 規子	26 陰山 英夫	28 加藤 泰之	33 川島 照矩	44 小林 賢雄
12 岡 正雄	15 佐々木 ヨ子	21 春日 フジ	26 三橋 直樹	29 杉田 孟	33 梶川 清子	47 窪田 和夫
12 渡辺 一男	16 伊達 洋一	21 石崎 富みどり	26 神田 友直	29 高野 木棉子	33 中村 良男	48 永淵 明男
12 西脇 潤	16 篠山 弘子	21 高橋 辰高	27 大矢 八郎	29 福土 和子	33 飯田 朗	48 渡辺 かずみ
13 岸 亨	16 永田 昭夫	22 小豊 田宏彦	27 楠山 次郎	29 藤森 郁子	33 鈴木 純子	48 山縣 喜代子
13 高見 沢裕	17 大村 條之	22 豊田 武士	27 石井 良雄	29 河村 眞こと	33 益樋 和子	49 中村 口村
13 澤原 昌	17 曾我 彦三	22 張 富夫	27 臼々木 洋子	29 江口 美代	33 樋田 千鶴	52 水口 紀平
13 高岡 生太	17 山田 一彦	22 西岡 悦子	27 辻 三智子	29 江口 美代	33 尾形 千鶴	64 中川 三勲
13 吉大 収	17 岩谷 倫久	23 安藤 弘道	27 清水 悦子	29 浅川 英一	33 西岡 万里	66 益井 絵
13 村松 樹郎	17 山本 毅直	23 大塚 間井	27 桑田 俊雄	29 松岡 利勝	34 西今 泉伸	
13 三宅 雅彦	17 板橋 正	23 秋安	27 沼本 融	30 玉利 安弘	34 今泉 伸夫	
13 立原 千嘉子	17 岡崎				34 漆畑	
13 宮川 英子						

編集後記

少子高齢化の時代、小田急線の下北沢駅付近の再開発が進んでおりますが、大原、代田、北沢地域も大きく変わろうとしています。その中で東大原小学校同窓会はそのような存在であり続けるのか、皆様とともに考えなくてはならない時期に来ていると思います。

同窓会報は平成二十一年度より年二回発行することになりました。本号では、去る四月に行われた定時総会の内容と、五月に行われた「学童疎開の跡を訪ねて」の旅の記事が中心となりました。来年三月に発行する二号は同窓の皆様からの寄稿を中心に掲載する予定です。どうか皆様、気楽に投稿してください。

平成二十二年度は昨年度と同様、同窓生親睦旅行、親睦ゴルフ、各種学校行事への参加などを実施する予定です。新しい事業として母校PTAに協力して同窓会腕章を持ち、同窓会防犯パトロールを実施します。時間に追われて忙しい毎日を送っておられるPTAや地域の方々には、依存するのではなく、より時間的に余裕がある元気な中高年同窓生が、子供たちの安全を守るために積極的に動くようではありませんか。

本同窓会は政治・宗教・思想について中立を守ります